

# 自己理解を深める「キャリア・パスポート」の効果的な活用

—自分のよさや可能性を高めようとする姿をめざして—

キャリア・パスポート研究会議

石川 友則<sup>1</sup>

伊東 有希<sup>2</sup>

本田 真人<sup>3</sup>

林 裕輔<sup>4</sup>

## 要 約

学習指導要領（平成 29 年告示）では、学校の教育活動にキャリア教育が明確に位置付けられた。本市では平成 27 年より、「かわさき教育プラン」の中に位置付けられている「キャリア在り方生き方教育」を推進し、「キャリア在り方生き方ノート」を活用するとともに、令和 2 年から「キャリア・パスポート」の取組が始まり、約 4 年が経とうとしている。しかし、本市の「キャリア・パスポート」に対する活用状況に関して、各学校のキャリア在り方生き方教育担当者にアンケート調査を行ったところ、「キャリア・パスポート」の効果や活用方法について教師が不安を抱いていることが分かった。研究員のクラスの児童生徒に行ったアンケートでは、「キャリア・パスポート」が目標を立てるのに役立つと感じている児童生徒が少なく、教師、児童生徒とも「キャリア・パスポート」が有効に活用されていないことが課題として明らかになった。

本研究会議では、小学校から高等学校までの 12 年間を通して、児童生徒が自分のキャリア形成に向けて、「キャリア・パスポート」を効果的に活用するためには、児童生徒自身が自分を理解することから始まると考えた。そこで、キャリア教育の基礎的・汎用的能力を構成する 4 つの能力の 1 つである自己理解・自己管理能力に着目し、児童生徒の自己理解を深めるための「キャリア・パスポート」の効果的な活用の仕方を研究することにした。

本研究会議では、ジョハリの窓の理論とキャリア教育の基礎的・汎用的能力の 1 つである自己理解・自己管理能力に着目して分析し、自己理解を「Ⅰ：自分を知る」「Ⅱ：自分のよさや可能性を高めようとする」の 2 段階に分けた。この点を踏まえ、児童生徒が「Ⅰ：自分を知る」ために、まず「キャリア・パスポート」で振り返り目標を定め、自分の取組に対して自己開示と他者からのフィードバックを行う。その段階を経てから、教師がこれからの生活に生かしていく視点を与えることで、児童生徒は「Ⅱ：自分のよさや可能性を高めようとする」のではないかと考えた。本研究会議では、児童生徒が自分のよさや可能性を高めようとする姿をこれからの生活につなげている姿と定義し、本研究主題を設定し検証を行った。

検証を通して、児童生徒は「キャリア・パスポート」に蓄積したワークシートを振り返ることで、過去の自分を踏まえた目標が設定でき、他者からのフィードバックを受け、自分を客観的に振り返り、自分では気付かなかった自分に気付くことができた。そして、教師が児童生徒にこれからの生活に生かしていく視点を与えると、自分のよさや可能性をこれからの生活につなげようとする姿が、検証授業中の児童生徒の言動やワークシートの記述、授業後のアンケートから示唆された。

キーワード：「キャリア・パスポート」、自己理解、キャリア教育、基礎的・汎用的能力

## 目 次

I 主題設定の設定……………26	3 検証方法……………32
1 はじめに……………26	4 検証授業……………32
2 「キャリア・パスポート」とは……………26	III 研究のまとめ……………40
3 本市の教師と児童生徒の実態……………26	1 研究の成果……………40
4 研究の方向性……………27	2 より効果的な活用をするための課題と方法……………42
5 研究主題……………29	3 終わりに……………44
II 研究の内容……………30	参考文献……………44
1 研究の方針……………30	指導助言者・研究協力者……………44
2 研究の仮説……………31	

<sup>1</sup>川崎市立宮前平中学校教諭（長期研究員）

<sup>2</sup>川崎市立東小倉小学校教諭（研究員）

<sup>3</sup>川崎市立虹ヶ丘小学校総括教諭（研究員）

<sup>4</sup>川崎市立宮内中学校総括教諭（研究員）

# I 主題設定の理由

## 1 はじめに

AI 技術の発達やグローバル化の進展、絶え間ない技術革新等により、未来を予測することが困難な時代<sup>1</sup>となっている。そのような変化に対応するためには、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度」<sup>2</sup>が求められている。小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編（以下、小学校解説総則編という）では、「第 3 章 第 4 節 1 児童の発達を支える指導の充実（3）」に「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」<sup>3</sup>が示されるとともに、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説特別活動編（以下、小学校解説特別活動編という）では、学級活動の内容に「（3）一人一人のキャリア形成と自己実現」<sup>4</sup>が新設され、学校の教育活動にキャリア教育が明確に位置付けられた。こうしたことを受けて、小学校から高等学校までの 12 年間を通じて、自己のキャリア形成を見直し振り返り、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオが「キャリア・パスポート」である。本市では平成 27 年度より、「かわさき教育プラン」<sup>5</sup>に位置付けられている「キャリア在り方生き方教育」に取り組み、「キャリア在り方生き方ノート」を活用するとともに、令和 2 年度から「キャリア・パスポート」を導入して、約 4 年が経とうとしている。

## 2 「キャリア・パスポート」とは

キャリア教育、「キャリア・パスポート」の定義は、今後の学校におけるキャリア教育・職業教育への在り方について（答申）（以下、在り方答申という）において、「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項に、表 1 のように示されている。この定義により、キャリア教育は、一人一人の社会的・職業的自立に向けた教育であり、必要な基盤となる能力や態度を育てる<sup>6</sup>こと、「キャリア・パスポート」は、自分の足跡を振り返りながら、現在の自分を見つめ、自分の将来や生き方を考えることができるもの<sup>7</sup>と捉えることができる。また、「工夫されたポートフォリオ」<sup>8</sup>と示されているが、そもそも教育分野のポートフォリオとは、「児童生徒のレポートや制作物をファイルに入れて保存する方法」<sup>9</sup>と記されており、これまでも多くの教師が行っている。しかし、児童生徒の成果物やワークシートを、学年を越えて振り返ってきただろうか。長田（2018）によれば、今までも多くの学校では、ポートフォリオ教材が使われていたが、担任が変わると引き継がれることはまれ<sup>10</sup>だと指摘している。「キャリア・パスポート」を活用することにより、これまで学年単位で終わってしまった児童生徒の学びを、小学校から高等学校までの 12 年間において継続して、自分のキャリア形成を見直し振り返ることができるのである。

表 1 キャリア教育、「キャリア・パスポート」の定義

### ●キャリア教育の定義

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

### ○キャリア・パスポートの定義

自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりしながら、自己の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオ

## 3 本市の教師と児童生徒の実態

### （1）本市の教師の実態から

平成 28 年度から「キャリア在り方生き方教育」を行ってきた本市の教師は、「キャリア・パスポート」についてどのように受け止めているのであろうか。令和 5 年 4 月に本市のキャリア在り方生き方教育担

<sup>1</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』平成 29 年 p.1（中学校 2017 年 p.1）

<sup>2</sup> 文部科学省 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」平成 23 年 p.17

<sup>3</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』平成 29 年 p.101（中学校 2017 年 p.99）

<sup>4</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編』平成 29 年 pp.58-60（中学校 2017 年 p.57-59）

<sup>5</sup> 第 2 次川崎市教育振興基本計画「かわさき教育プラン」平成 27 年から概ね 10 年を対象とした計画

<sup>6</sup> 文部科学省 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」平成 23 年 p.17

<sup>7</sup> 文部科学省『「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項』

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/08/21/1419890\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/08/21/1419890_002.pdf) 2019 年 p.2 2024 年 3 月 14 日検索

<sup>8</sup> 同上

<sup>9</sup> エスメ・グロワート『教師と子供のポートフォリオ評価』論創社 1999 年 p.8

<sup>10</sup> 長田徹『「キャリア・パスポート」が描く生徒の未来』キャリアガイダンス vol.423 リクルート進学総研 2018 年 p.13

当者にアンケート<sup>11</sup>（以下、担当者アンケートという）を実施した。「『キャリア・パスポート』の効果を実感したことがありますか」の質問に対して、48.9%の学校が「ほとんどない」「ない」と回答した（図1）。「行事前に『キャリア・パスポート』で振り返る場面を作ったことがありますか」の質問には54.7%が「ない」と答え（図2）、「年間で振り返る場面を作った回数」の質問では、「0回」が24.5%、「1回」が35.8%と合わせて約60%を占めている（図3）。さらに、「困っていること」の質問では、約70%以上の教師が「キャリア・パスポート」について困っていることがあり（図4）、自由記述では、回答した約90%が「活用の仕方が分からない」「使った効果が分からない」「『キャリア・パスポート』を行う意味が分からない」といった記述であった（表2）。このことから、教師が「キャリア・パスポート」の活用方法や効果に対して、不安や疑問をもっていることが明らかになった。

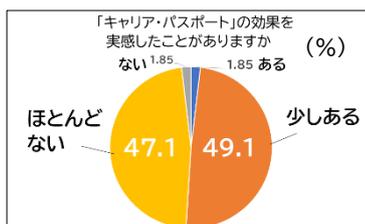


図1 担当者アンケート① (n=53)

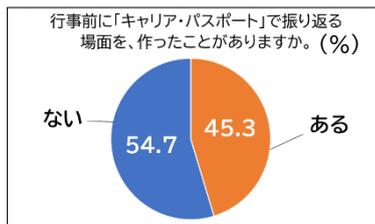


図2 担当者アンケート② (n=53)

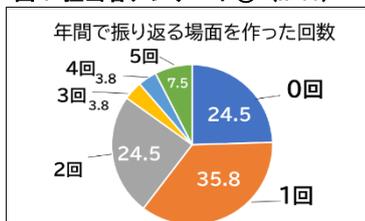


図3 担当者アンケート③ (n=53)

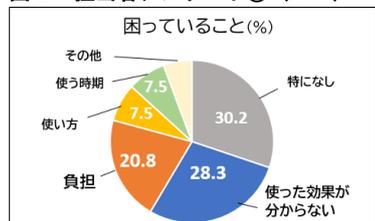


図4 担当者アンケート④ (n=53)

表2 担当者アンケート⑤自由記述 (n=36)

「キャリア・パスポートについて困っていること」自由記述の具体的な内容(要約)

自由記述の主な内容	件数	%	合計件数	合計 (%)	分類
活用の仕方(工夫・つなげ方等)	19	52.7	32	88.8	キャリア・パスポートの 効果や活用等
使った効果(子どもの伸びしろなど)	12	33.3			
キャリア・パスポートの価値	1	2.8			
校種の接続について	2	5.6	4	11.2	その他
カリキュラムへ組み込み方	1	2.8			
校内への周知	1	2.8			
内容別合計	36	100	36	100	

## (2) 本市の児童生徒の実態から

本市の児童生徒の実態はどうであろうか。本研究員のクラスの児童生徒にアンケート<sup>12</sup>（以下、児童生徒アンケートという）を実施した（図5～7）。「『キャリア・パスポート』は、自分の成長が実感できるもの」と「めあてや目標を立てるのに役立つもの」の質問を比べると、「めあてや目標を立てるのに役立つもの」の質問のほうが、「当てはまる」「少し当てはまる」の割合が低いことが分かった。このことから、児童生徒は「キャリア・パスポート」を、自分のめあてや目標を立てる場面において効果的に活用できていないことが明らかになった。

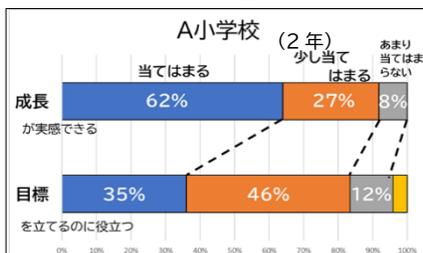


図5 児童生徒アンケート① (n=33)

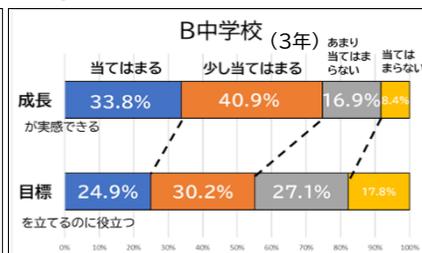


図6 児童生徒アンケート② (n=32)

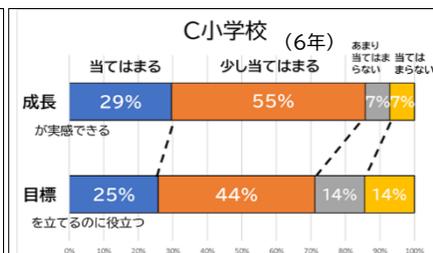


図7 児童生徒アンケート③ (n=27)

## 4 研究の方向性

### (1) 本市の教師、児童生徒の実態から

担当者アンケート、児童生徒アンケートから2つの実態が見えてきた。

1つめは、本市の教師が「キャリア・パスポート」の活用方法や効果に不安や疑問を感じていること

<sup>11</sup> 令和5年4月28日に川崎市キャリア在り方生き方教育担当者会の中で小学校114校、中学校52校、高等学校5校を対象に、2件法・4件法・複数回答・自由記述で行った。

<sup>12</sup> A小学校n=33、B中学校n=32、C小学校n=27に対して、当てはまる・少し当てはまる・あまり当てはまらない・当てはまらない、の4件法で行う

である。教師が「キャリア・パスポート」の意義や目的を意識せずワークシートを蓄積させるだけでは、児童生徒は「キャリア・パスポート」の効果を実感することができず、藤田（2019）が示すように、ただの「思い出アルバム」<sup>13</sup>になってしまう。キャリア教育に関する総合的研究第二次報告書によれば、キャリア教育の重要性を認識している担任の学級の児童生徒のほうが、自分の日常生活や行動について肯定的に評価をした<sup>14</sup>と分析している。そうであるならば、教師が「キャリア・パスポート」の重要性について理解を深めていくことが必要である。さらに、小学校解説特別活動編では「学校間で連携しながら」<sup>15</sup>と示されており、校種間の連携が大切であり、小学校から高等学校までの活用を市全体で考える必要がある。また、「キャリア・パスポート」を負担に思っている割合が20%以上であったことも大きな懸念事項である（図4）。昨今の教師は多くの業務を抱えており、さらに新しいものが増えたと捉える教師が多い<sup>16</sup>。しかし、安井（2022）は、今まではそれぞれの学習が「点」として完結してしまっていたが、その「点」と「点」をつなげること。だから特別に新しいことをするイメージはない<sup>17</sup>と特徴付けている。つまり、「キャリア・パスポート」は特別なことを行うのではなく、今までの取組をつなげることであり、つなげることで得られる効果やその活用の仕方を示していくことが大切だと考えた。

2つめは、児童生徒にとって、「キャリア・パスポート」は「成長が実感できるもの」にはなっているが、「目標を立てるのに役に立つもの」にはなっていないという現状である。これでは、「キャリア・パスポート」が前述のとおり思い出アルバムで終わってしまうのは言うまでもない。長田（2022）が、「子どもたちにとっては、国語は国語、行事は行事といった印象が強い」「『各教科や領域での学びが、実は自分が将来生きていくことにつながっている』ということを実感できるようにしてほしい」<sup>18</sup>と述べているように、学んだことを次の目標やこれからの生活につなげることが大切であり、自己の将来へとつなげることを期待している。

この2つから、児童生徒が成長を実感するだけでなく、自分のめあてや目標を立てたり、これからの学びや生活などにつなげたりする姿を本研究会議が示すことができれば、本市教師の不安や疑問も解決することができるのではないだろうかと考えた。では、どのように活用すれば「キャリア・パスポート」が児童生徒のめあてや目標を立てたり、学んだことを自分の将来や生活につなげたりすることができるものになるのだろうか。長田（2022）は「なぜ振り返るのか」というと、それは確かな根拠をもって、この後の見通しを立てるためです。『自分にはこういうよさや力がある。こういう課題がある。だから、こうなりたい』という見通しを立てるためには、確かな振り返りが必要<sup>19</sup>と述べ、安井（2022）は、「今の自分がどういう状態なのかがわかって、初めて地に足がつく。自分で今の学びの現在地がわかるようにすることが大切」<sup>20</sup>だと述べている。このことから、本研究会議では児童生徒がめあてや目標を立てたり、自分の生活や将来に学びをつなげたりするためには、自分が取り組んできたことを振り返り、自分自身が今の自分を理解することが必要だと考えた。

## （2）育成をめざす資質・能力と育てたい子どもの姿

「在り方答申」では、キャリア教育における基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力が示されている（表3）。本研究会議では、自己理解・自己管理能力の自己理解に着目した。そこに示されている、「今後の自分自身の可能性を含めた肯定的理解に基づき」から、自己理解を「I：自分を知る」、「今後の成

<sup>13</sup> 藤田晃之『キャリア教育フォービギナーズ』実業之日本社 2019年 p.305

<sup>14</sup> 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育に関する総合的研究第二次報告書」 2021年 p.85

<sup>15</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』平成29年 p.83（中学校 2017年 p.73）

<sup>16</sup> 児美川孝一郎『キャリア教育がわかる：実践をデザインするための（基礎・基本）』誠信書房 2023年 p.23

<sup>17</sup> 長田徹・安井政樹『振り返り』で、学びをつなぐ』道徳科通信No.4 光村図書 令和4年 p.5

<sup>18</sup> 同上

<sup>19</sup> 長田徹・安井政樹『振り返り』で、学びをつなぐ』道徳科通信No.4 光村図書 令和4年 p.3

<sup>20</sup> 同上

長のために進んで学ぼうとする力」から、「Ⅱ：自分のよさや可能性を高めようとする」の2段階に分けた。4（1）で長田<sup>19</sup>、安井<sup>20</sup>が述べていることを踏まえ、本研究会議のめざす子どもの姿を、『キャリア・パスポート』で振り返ることから、自己理解を深め、自分のよさや可能性を高めようとする姿」とした。

### （3）自己理解をしている姿とは

本研究会議では、ジョハリの窓を参考に自己理解を深めることにした（図8）。津村・山口（1992）によれば、自己開示<sup>21</sup>と他者からのフィードバックにより「開放の領域」を広げ、「隠している領域」と「盲点の領域」を狭めていくことで自己理解が深まる。また、「未知の領域」とは自分も他者も分かっていない領域であり、「開放の領域」が広がることで自分の可能性や潜在能力の発見が起こる場としている。そして、「未知の領域」に発見が起こるプロセスによって、我々は自他をよく知ることが可能となる<sup>22</sup>と説明している。また、グラバア俊子（2008）は、未知の領域のことを「可能性」<sup>23</sup>と示している。「キャリア・パスポート」は、「大人（家族や教師、地域住民等）が対話的に関わるができるもの」<sup>24</sup>と示されているが、本研究会議では、他者に友達を加え、自己理解を深めていくものとした。自己理解には2つの段階があることは、4（2）で明記した通りである。ジョハリの窓と本研究会議で示した自己理解の2つの段階を合わせ、「キャリア・パスポート」

で振り返ることから始まる、「Ⅰ：自分を知る」段階を、自己開示と他者からのフィードバックにより、「自分が思っていた自分を他者からさらに価値付け<sup>25</sup>されたり、自分が知らなかった自分について新たに気付いたりした姿」とした。また、キャリア教育に関する総合的研究第二次報告書（2021）によると、「生徒自身の気づきや成長を学校生活の文脈に結び付けて捉え直すような事後指導が必要」<sup>26</sup>、青木（2021）が、「少し前の自分を振り返り、少し先の将来を見通し、今の自分を見つめ、意思決定して実践する」<sup>27</sup>と述べていることから、「Ⅱ：自分のよさや可能性を高めようとする」段階を、「自他からの価値付けによって、自分のよさや可能性を、これからの生活につなげようとする姿」と定義した。

## 5 研究主題

以上のことから、研究主題と副題を次のように設定した。

自己理解を深める「キャリア・パスポート」の効果的な活用  
—自分のよさや可能性を高めようとする姿をめざして—

表3 本研究会議が見いだした自己理解の段階（本研究会議作成）

基礎的・汎用的能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
基礎的・汎用的能力の関係	これらの能力は、包括的な能力概念であり、必要な要素をできる限り分りやすく提示するという観点でまとめたものである。この四つの能力は、それぞれが独立したものではなく、総合に関連・依存した関係にある。そのため、特に順序があるわけではなく、また、これらの能力をすべてのが同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。			
自己理解・自己管理能力	「自己理解・自己管理能力」は、自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。			
自己理解の段階				
Ⅰ 自分を知ること				
Ⅱ 自分のよさや可能性を高めようとする				

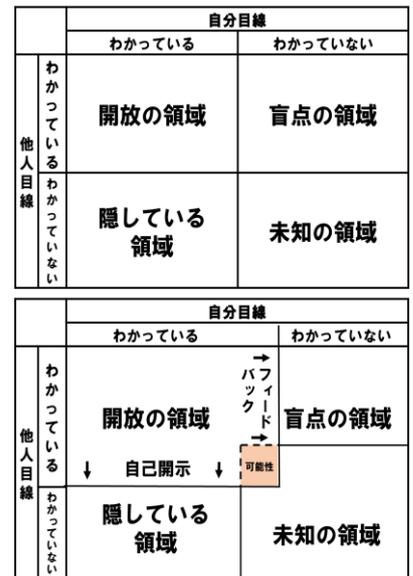


図8 津村・山口（1992）のジョハリの窓をもとに、本研究会議作成

<sup>21</sup> 本研究会議では自己開示を、自分の取組を振り返り、自分が頑張ったと思ったことやよりよくできそうだったことを他者に伝えることとする。

<sup>22</sup> 津村俊夫・山口真人『人間関係トレーニング 私を育てる教育への人間学的アプローチ』ナカニシヤ出版 2008年 pp.62-65

<sup>23</sup> グラバア俊子・小山田奈央「心の四つの窓—ジョハリの窓を活用する—」人間関係研究第7号 南青山大学人間関係研究センター 2008年 p.172

<sup>24</sup> 文部科学省『『キャリア・パスポート』の様式例と指導上の留意事項』

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/08/21/1419890\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/08/21/1419890_002.pdf) 2019年 p.2 2024年3月14日検索

<sup>25</sup> 本研究会議では、相手の取組を認めたり、よいところを伝えたりするなど、肯定的に相手を認めることを価値付けると定義した。

<sup>26</sup> 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育に関する総合的研究第二次報告書」2021年 p.74

<sup>27</sup> 青木洋俊「学級活動の一連の学習過程における評価の充実と指導の改善—自己を生かし、協働してよりよい学級をつくる児童生徒の育成を目指して—」令和2年度研究紀要第34号 川崎市総合教育センター p.31

## Ⅱ 研究の内容

### 1 研究の方針

#### (1) 自己理解が始まる「キャリア・パスポート」

本研究会議では、「キャリア・パスポート」は、振り返りと見通しをつなぐものだと考える。児童生徒が、「キャリア・パスポート」でこれまで蓄積したワークシートを振り返り、めあてや目標を立て、自分の取組を考えていくことで「今」の自分へ焦点化していく。そして、その取組を自他から振り返ることで自己理解を深め、新たな自分のよさや可能性に気づき、これからの生活の様々なこととつなげていく視点をもつことで見通しが広がっていく（図9）。このような「キャリア・パスポート」で振り返ることから始まる一連の活用が、自己理解を深め、「キャリア・パスポート」を振り返りと見通しをつなげるものにしていくと考えた。

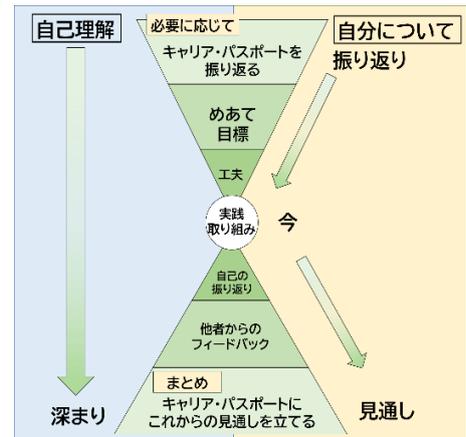


図9 自己理解が深まる「キャリア・パスポート」のイメージ（本研究会議作成）

#### (2) これまでを振り返る「キャリア・パスポート」

「キャリア・パスポート」で振り返る場面は、教師が振り返る視点を児童生徒に問うことで、児童生徒自身が必要と感じるように意図的に場面を設定する。児童生徒が「キャリア・パスポート」で振り返る視点は、これまでの自分の取組から、今年度の活動に生かせるものは何かという視点<sup>28</sup>である。例えば、運動会の振り返りから「始めから一生懸命に取り組んでおけばよかった」と昨年度の自分の記述があれば、その児童生徒は、運動会の練習初日から一生懸命に取り組もうとするだろう。また、「一生懸命に取り組んだことでやり抜く大切さを学んだ」という記述があれば、行事に対する姿勢を考えるだろう。そして、「キャリア・パスポート」で振り返ることでめあてや目標を設定したからこそ、自分がどのように取り組むことができたのか、どの程度めあてや目標を達成できたかを確認する視点<sup>29</sup>がもてるのである。その具体的な振り返りが自己開示と他者からのフィードバックを比較する材料となり、自己理解が深まることにつながる。また、教科や行事で高めた力や育んだ心と合わせて、頑張ったことやよりよくできそうなところを記入する欄も設定した。この欄は自己開示を行うときにも役に立ち、他者からフィードバックを受けたときに、自分が知っていた自分なのか、自分だけでは気付かなかった自分なのかを比較する指針になる。このように、「キャリア・パスポート」で振り返ることにより、自己理解につながっていくと考える。

#### (3) これからの見通しにつなげる「キャリア・パスポート」

「キャリア・パスポート」の例示資料等について<sup>30</sup>（2019）や、かながわ版「キャリア・パスポート」<sup>31</sup>（2022）などでも、他者からコメントをもらう欄は児童生徒の振り返りの後にある（図10）。しかし、自己開示と他者からのフィードバックが自己理解を深めるとすれば、他者からのフィードバックの後にもう一度自分自身で振り返る必要がある。そこで本研究会議では、自己開示と他者からのフィードバックを受けた後に、もう一度自分自身で振り返る欄を設けることにした。ここでの振り返りの視点は、自分のよさと課題を見つける視点や学びを日常に生かしていく視点、次の活動につなげようとする視点<sup>32</sup>

<sup>28</sup> 文部科学省 国立政策研究所教育課程研究センター『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』文溪堂 2019年 p.23

<sup>29</sup> 同上

<sup>30</sup> 文部科学省『「キャリア・パスポート」例示資料等について』[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/detail/1419917.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917.htm) 令和6年3月12日検索

<sup>31</sup> 神奈川県教育委員会「かながわ版キャリア・パスポート」<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/ent/f537614/kyariapasu.html> 令和6年3月12日検索

<sup>32</sup> 文部科学省 国立政策研究所教育課程研究センター『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』文溪堂 2019年 p.23

である。小学校学習指導要領総則編には「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら」<sup>33</sup>と示されており、自分のよさや可能性を高めようと思ったものを何につなげていくのかは、児童生徒のそれぞれの意思決定に関する内容であることが望ましい。しかし、長田（2022）が「学びと自分の将来や生活とをいかに結び付けるかも、ポイント」<sup>34</sup>と述べ、見美川（2023）は、見通しは将来の目標を決めることではなく、視点を得ること<sup>35</sup>と述べていることから、児童生徒にこれからの生活や目標に生かす視点を与えることで、自分のよさや可能性をこれからの生活につなげられると考えた。

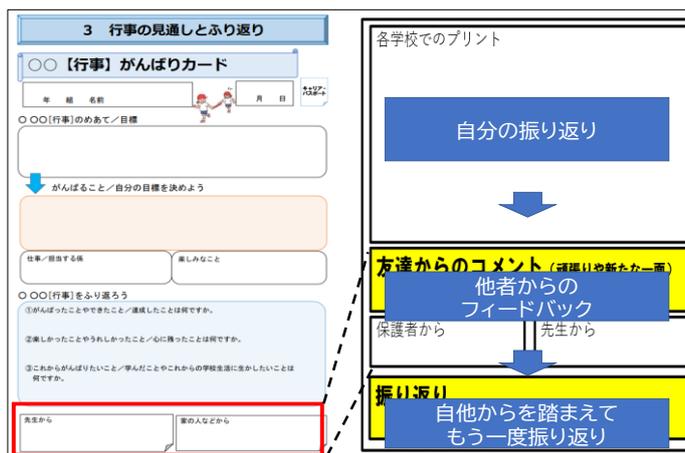


図10 他者からのフィードバックと振り返りを記入する位置の比較

#### （4）各学校によって変わる「キャリア・パスポート」

「キャリア・パスポート」に蓄積されたワークシートに書かれた振り返りの内容は、一人一人異なるため、児童生徒が自分で必要なワークシートを選択し、振り返ることが重要であると考えられる。しかし、「キャリア・パスポート」をこれまで効果的に活用できていない学校の児童生徒に、いきなり『キャリア・パスポート』で振り返りましょう」と伝えても、どのワークシートを振り返ったらよいのか分からない。そこで、児童生徒が振り返る「キャリア・パスポート」に蓄積してあるワークシートを、学校ごとに変えることにした。また、他者からのフィードバックは、教師が題材ごとに適切だと思う対象からもらうようにした（表4）。この点に関しては、「各地域、

表4 各学校における「キャリア・パスポート」の活用場面や使用状況

各学校における実態に応じ、学校間で連携しながら、柔軟な工夫を行うこと」<sup>36</sup>と小学校解説特別活動編に示されており、学校の状況に合わせて変える必要があると捉えることができる。

学校	学年	「キャリア・パスポート」のこれまでの使用状況	振り返る「キャリア・パスポート」に蓄積されたワークシート	実施時期	教科等	題材・議題 学習課題	他者からの フィードバック
A 小学校	2	効果的に活用できていない	1年前と同じ内容項目	7月	道徳	自分のよいところについて考えよう	友達 教師
B 中学校	3	効果的に活用できていない	1年前と同じ行事	9月	特別活動	合唱 コンクール	友達 教師 保護者
C 小学校	6	継続して取り組んでいる	蓄積されたすべてのワークシート	10月	特別活動	運動会	友達 教師 保護者

## 2 研究の仮説

Iで記述した内容及び、II 1で示した研究の方針を基に、仮説①～③を立てた。

- ①児童生徒は、これまでの「キャリア・パスポート」を活用することで、自分の取組を具体的に振り返ることができるだろう。
- ②児童生徒は、自己開示と他者からのフィードバックを行うことで、自分が他者から価値付けられたり、自分が気付かなかった自分について新たに気付いたりすることができるだろう。
- ③教師がこれからの生活に生かす視点を与えると、児童生徒は自分のよさや可能性をこれからの生活の場面とつなげることができるだろう。

<sup>33</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』平成29年 pp.23-24（中学校 2017年 p.25）

<sup>34</sup> 長田徹『振り返り』で、学びをつなぐ』道徳科通信 No.4 光村図書 令和4年 pp.4-5

<sup>35</sup> 見美川孝一郎『キャリア教育がわかる：実践をデザインするための〈基礎・基本〉』誠信書房 2023年 p.12

<sup>36</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』平成29年 p.83（中学校 2017年 p.73）

### 3 検証方法

仮説①～③について、「キャリア・パスポート」に蓄積するワークシートの記述、自己開示と他者からのフィードバックの記述の比較、児童生徒同士の発話記録を基に検証授業内の観察・分析をする。また、検証授業前後のアンケート調査を行い、児童生徒の意識の変容を追うこととした。着目児童生徒については、事前に行ったアンケート項目の中の基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力の1つである自己理解・自己管理能力に関する質問<sup>37</sup>に対して低い回答をし、教師が自分のよさを実感できていない、もしくは自分の成長を前向きに捉えられないと感じている児童生徒を選んだ(表5)。

表5 着目児童生徒の自己理解・自己管理能力のアンケート結果(「キャリア在り方生き方教育の手引き」を参考に本研究会議作成)

質問	質問内容	着目児童A (クラス平均)	着目生徒B (クラス平均)	着目児童C (クラス平均)
質問④	自分の長所や短所について把握しようとしていますか。	3 (3.4)	1 (3.4)	2 (3.3)
質問⑤	自分の興味・関心について、進んで取り組んでいますか。	3 (3.2)	3 (3.0)	3 (2.9)
質問⑥	苦手なことやうまくいかないことでも、あきらめず取り組もうとしていますか。	4 (2.7)	4 (2.9)	3 (2.9)

### 4 検証授業

#### (1) 道徳による実践 【A小学校 第2学年】

A小学校は、表6に示すような内容で検証授業を行った。

道徳科 内容項目 A4 個性の伸長

表6 A小学校の授業内容

教材名	「ありがとう りょうたさん」
題材	自分のよいところについて考えよう
ねらい	自分の得意なことやよいところに気づき、それを伸ばしていこうとする実践意欲と態度を育てる。
授業の流れ	「自分のよいところはどんなところなのか」という課題意識をもたせ、昨年度の「キャリア・パスポート」を振り返る場面を作った。また、他者からのフィードバックにより、「今」の自分のよいところを伝えてもらうことで、自分のよさに気づき、そのよさをこれからの生活につなげていく視点をもたせた。

#### ①着目児童Aの実際

着目児童Aは、教師の「自分のよいところはなんですか」の発問に対して、「キャリア・パスポート」に蓄積している昨年度に行った「よいところの花をさかせよう」のワークシートを振り返った。「おもしろいところがあなたのよいところ」とコメントをもらっているのにも関わらず、「手をとめて見るのがにがてなことです」とワークシートに記入し、自分のよいところではなく、自分の苦手なところに注目した。しかし、班の友達に「みんなを笑わせてくれるところがよいところ」だと伝えられた着目児童Aは、「昨年度も同じことを言われてただけど」とつぶやき、うれしそうに昨年度に友達からもらったコメントを隣の友達に見せた(図11)。昨年度の自分と今の自分のよいところを比較することで、自分のよさが1年前と変わらず、おもしろいところだと気付いたことが分かる。友達からもらったコメントを並べながら着目児童Aは、「自分のよいところは、おもしろいところです。もっと続



図11 昨年度の「キャリア・パスポート」を見せている着目児童A

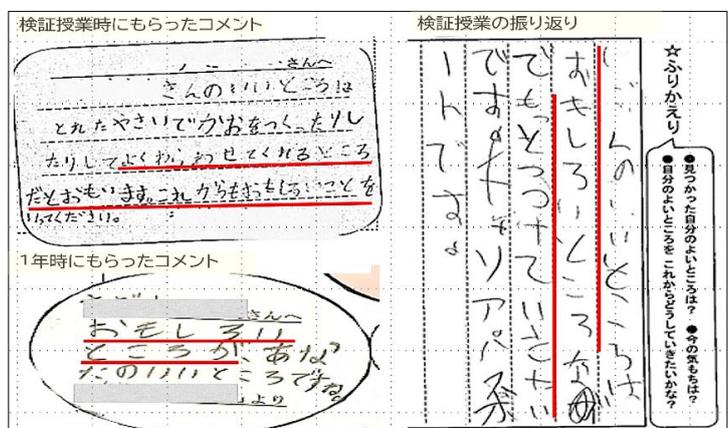


図12 昨年度の友達からのコメントと今回の授業で他者からもらったコメントを踏まえた着目児童Aの振り返り

<sup>37</sup> 川崎市教育委員会「キャリア在り方生き方教育の手引き」平成26年 p.39 「4：している」「3：どちらかといえばしている」「2：どちらかといえばしていない」「1：していない」の4件法で行う。

けていきたいです」と記述し、自分のよさに他者からの価値付けによって気づき、自分のよさをもっと続けていきたいと考え、これからの生活につなげることができた（図 12）。

検証授業前後の着目児童Aの自己理解・自己管理能力の比較では、質問4「自分の長所や短所を把握していますか」の質問に対して、「3：どちらかといえばしている」から、「4：している」に上がっており、検証授業前より肯定的な回答が見られた（図 13）。

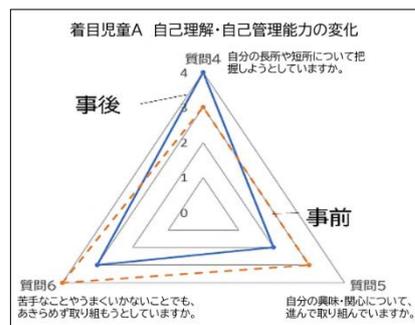


図 13 着目児童Aの自己理解・自己管理能力の変化

## ②学級全体の実際

ア これまでの「キャリア・パスポート」を活用することで、自分の取組を具体的に振り返ることができるだろう（仮説①）

図 14 は、授業後に行った『キャリア・パスポート』を振り返ることで、自分のよさを見つけることができたか」のアンケート結果である。94%の児童が「できた」「少しできた」と肯定的な回答をした。教師の「あなたのよいところはなんですか」の質問に対して、「自分のよいところはない」とつぶやく児童が多く見られたが、昨年度の「キャリア・パスポート」で振り返ることを促したことで、昨年度に友達や教師、保護者から書いてもらった自分のよいところを根拠として、自分のよさを確認することができた。振り返りの記述には、「私は、『キャリア・パスポート』を見たから、私のよいところが分かりました。『キャリア・パスポート』のよいところの花をさかせようを見て、ヒントにしました」や「友達が言ってくれたのもそうだけど、『キャリア・パスポート』を見たからです」などが見られた。このことから、自分のよさは何かという問題意識をもったタイミングで「キャリア・パスポート」を見返したことで、1年前に書かれた自分のよさと、現在の友達や担任からフィードバックを受けた自分のよさを比較し、自分のよさに改めて気付くことができたと考えられる。

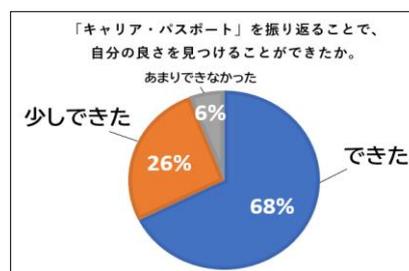


図 14 A小学校アンケート回答① (n=36)

イ 自己開示と他者からのフィードバックを行うことで、自分が他者から価値付けられたり、自分が気付かなかった自分について新たに気付いたりすることができるだろう。（仮説②）

自己開示と他者からのフィードバックを行う場面は、4人班で行った。あらかじめ「友達のよいところ」についてカードにコメントを書いておき、お互いに交換したカードをワークシートに貼ることにした。また、カードを渡す場面では、カードに書いた内容を言葉で伝えてから渡すように確認した。授業後に行った「友達や先生からのコメントを見て、自分では気付かなかった自分を知ることができたか」のアンケートでは、「できた」「少しできた」と94%の児童が肯定的な回答をした（図 15）。「友達や先生からコメントをもらう活動をしてみて」の自由記述を、自己理解について記入した児童とそうでない児童に分け、その人数を数えた。すると、他者からのフィードバックにより、「自分では気付かなかったことが周りの人から教えてもらえ、気付くことができて嬉しかった」や「自分にはこんなによいところがあるなんてびっくりした」など、自分の「新たな一面」について知れたといった記述が17件あった（表7）。このことから、児童生徒は他者からのフィードバックにより、自分だけでは気付かなかった自分の新たな一面に気付くことができることが明らかになった。

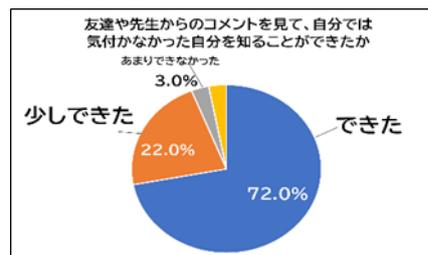


図 15 A小学校アンケート回答② (n=36)

表 7 A小学校の授業後の自由記述についてカテゴリー分析 (n=23)

	カテゴリー	数
自己理解について	新たな一面	17
	成長	6

このことから、児童生徒は他者からのフィードバックにより、自分だけでは気付かなかった自分の新たな一面に気付くことができることが明らかになった。

ウ 教師がこれからの生活に生かす視点を与えると、児童生徒は自分のよさや可能性をこれからの生活の場面とつなげることができるだろう（仮説③）

振り返りを記述する前に「これから自分のよいところをどうしたいですか」と発問し、振り返る視点を与えてから取り組ませた。この発問により、児童は自分のよさに気付いただけでなく、自分のよさをこれからの生活につなげるきっかけとなった。図 16 は、1年時と2年時の振り返りの記述の中に、これからの生活につなげている記述がある児童と授業の感想のみを記述した児童の割合の比較である。これからの生活につなげている記述を書いた割合が 13.9%から 38.8%になり、24.9ポイント増加している。「今日の活動はおもしろかった」と授業の感想のみの記述している児童に対し、これからの生活につなげる記述では「お笑いを続けたい。…（中略）、他にも『ダジャレ詰め合わせ』や『〇コマ漫画』も作ってみんなを笑わせようと思いました」や「みんなから教えてもらってうれしかった。いいところを捨てないで、ずっと続けて進化していきたい」などが見られた。他者からのフィードバックにより、自分が気付かなかった自分のよさに気付いたり、自分がよいところだと思っていたところを改めて価値付けされたりしたことで、自己理解が深まり、自分のよさや可能性をこれからの生活につなげようとする姿が見られた。

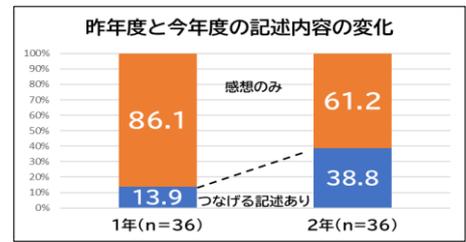


図 16 A小学校アンケート③回答 (n=36)

## (2) 特別活動による実践 【B中学校 第3学年】

B中学校は、表 8 に示すような内容で、合唱コンクール前と後の 2 回に分けて検証授業を行った。

### 特別活動 学級活動(2)合唱コンクール

表 8 B中学校の授業内容

	行事前	行事後
課題	今年度の合唱コンクールのめあてや目標を考えよう	合唱コンクールを通じて、身に付けた力や育まれた心を考えよう
ねらい	合唱コンクールの取組に対して、見直しをもつために「キャリア・パスポート」を振り返り、自分に合っためあてや目標を立てて実践できるようにする。	中学校最後の合唱コンクールを振り返り、自分の成長や頑張りから身に付けた汎用的な力を考え、これからの自分の学習や生活に生かしていこうとする態度を養う。
授業の流れ	今年度の合唱コンクールをよりよいものにしていくために、何がヒントになるのかという課題意識をもち、「キャリアパスポート」を振り返った。その振り返りから、めあてや目標を決めた。めあてや目標を達成するための具体的な取組を、4人班でGoogle Jamboardを活用して決めた。	合唱コンクール当日の映像を鑑賞した後、「キャリア・パスポート」に記入しためあてや目標を確認し、自分の取組について振り返った。4人班になり、自分の頑張ったところを伝えると同時に他者からのフィードバックをもらう場面を作った。最後に自分の振り返りと他者からのフィードバックを踏まえて、もう一度自分の取組について振り返る時間を確保した。

### ①着目生徒Bの実践

合唱コンクールのめあてや目標を決める場面では、教師の「昨年度の振り返りから今年度の取組に生かせるものは何か」の発問に、素早く昨年度の合唱コンクールの振り返りの欄に目を向けた。昨年度の合唱コンクールのワークシートを振り返り、「歌唱の技術については触れないで、声ばかり気にしていた」と書かれていた記述から、「自分ができることを精一杯やりたい」と今年度の目標を立てた（図 17）。この記述からは昨年度の振り返りと、今年度の目標につながりがないように見える。しかし、着目生徒Bは、授業後のインタビューの中で、「キャリア・パスポート」を振り返り、過去の自分から今回の活動につなげることができたと答えた。このことから、着目生徒Bは、記述には表れていなくても、「キャリア・パスポート」を振り返り、今年度の自分の取組につなげていることが分かった。



図 17 昨年度のワークシートを振り返る着目生徒B



図 18 他者からフィードバックを受ける着目生徒B

合唱コンクールを振り返る場面では、教師の「合唱コンクールを通して、身に付けた力や育まれた心を考えよう」の発問に、「どんな結果でもやりきったと思えるまで頑張った心」と記入した。そして、自分のめあてや目標を確認しながら、頑張ったことに、「リーダーとして自信をもって接することができた」と記入した。しかし、「最初からみんなにパートリーダーとして指導や声掛けをできたら、もっと完成度を高めることができたかもしれない」とよりよくできそうなところの欄に記入し、パートリーダーとしての迷いが読み取れる。また、友達から「クラスを明るく雰囲気してくれた」（図 18）、保護者と教師からは「パートリーダーとして頑張っていた」と自分が頑張ったと思っていたことが、改めて価値付けされたことで自分のよさに気付いた。着目生徒 B の振り返りには、自分がよりよくできそうなところに書いた内容が、他者からのフィードバックによって自信に変わり、「この経験を生かして様々なものに挑戦したい」と記述されており、これからの生活へつなげることができた（図 19）。授業後のインタビューからも、「キャリア・パスポート」で振り返り、めあてや目標を立て、取組の仕方と考えられたこと、他者からのフィードバックで自分のよさを実感したこと、そのよさをこれからの生活の場面でも生かしたいことなど、仮説①～③の姿が見られた（表 9）。

検証授業前後の着目生徒 B の自己理解・自己管理能力の比較では、質問 4 「自分の長所や短所を把握していますか」の回答が、「1：していない」から「4：している」になり、検証授業前より肯定的な回答をした（図 20）。

〇振り返り（・自分への気づき・担任の気持ち・これからどうしていきたい など）

二年生で初めてパートリーダーになり自分加が未熟だから痛感したが、みんなが真実に合唱コンクール組んで一着目本業で元気で長くれたおかげで自信が付き合唱コンやりきれたと思える。元気で長れました。傷いけいさあつたけれどパートリーダーの経験はこれからの自分良い影響を与えてくれたので、この経験を生かして様々な事に挑戦したいです。

図 19 着目生徒 B の振り返りの記述

表 9 着目生徒 B の検証授業後のインタビューの内容

質問①	1年前のキャリア・パスポートを見て、具体的に生かされたことは？
着目生徒 B 回答①	自分の過去の振り返りから、今回の合唱コンクールに生かすっていうのはもちろんあったんですけど…(中略)、今の自分から考えて何が足りなかったっていうのを考えられたので…(中略)、合唱のレベルが上げられたかなと思いました。
質問②	他の人からコメントをもらう活動を行って？
着目生徒 B 回答②	自分だけだと分からない視点か、ほかの人からだと見えて…(中略)、自分ではそう思ってたのに、周りからみんな同じことを書いてくれたので、そんな印象強かったんだって、すごい自分が頑張れたんだっていうのを理解できました。
質問③	学校生活・日常生活で生かせることは？
着目生徒 B 回答③	…(中略)、それに向かっていく姿勢っていうのを学べて、すごいこれからのクラス活動とか、ほかの社会的集団の中でもこの経験を生かして、同じ目標に向かって頑張りたいと思います。

着目生徒 B 自己理解・自己管理能力の比較

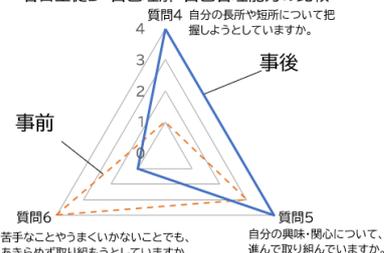


図 20 着目生徒 B の自己理解・自己管理能力の検証授業前後の比較

## ②学級全体の実際

ア これまでの「キャリア・パスポート」を活用することで、自分の取組を具体的に振り返ることができるだろう。（仮説①）

教師は、昨年度に自分がどんなめあてや目標を立てたのかを確認するように促し、自分の取組を振り返らせた。授業後に行った「昨年度の合唱コンクールを振り返ることで、今年めあてや目標が具体的に定められたか」の質問には、「できた」「どちらかといえばできた」と約 96.9%の生徒が肯定的な回答をした（図 21）。また、否定的な回答をした生徒の理由を見てみると、「去年歌う際に意識したこと」と答えている。このことから、否定的な回答をした生徒も、昨年度の振り返りが今年度のめあてや目標を立てるのに、役立てていることが分かった。図 22 はある生徒のワークシートである。この生徒は、「今年度は昨年度のような思いはしないように、クラスで1番声を響かせ

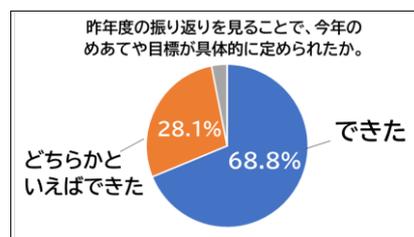


図 21 B 中学校授業後のアンケート① 回答 (n=32)

るくらいの思いで、毎日全力で練習に取り組みたい」と立てた目標に対して、「クラスで1番声を出すという目標を達成するために全力で練習した」と自分の取組を振り返り、身に付いた力の欄に「自信をつける力」と記述した。こ

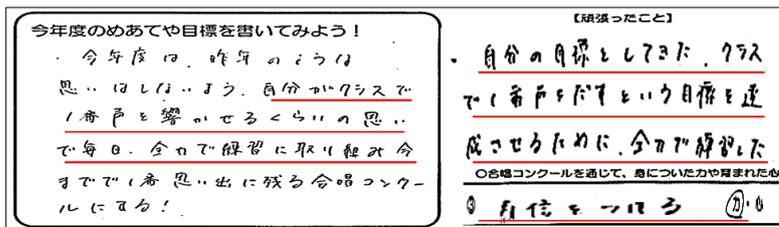


図 22 生徒のワークシートの記述

このことから、昨年度の取組を振り返ることで、今年度の自分の取組に対する具体的な目標を立てることができたと見える。そして、その目標を達成するためにどんな取組をしてきたのかを考えたことで、自分の身に付けた力や育まれた心を明確にできたと考えられる。

イ 自己開示と他者からのフィードバックを行うことで、自分が他者から価値付けられたり、自分が気付かなかった自分について新たに気付いたりすることができるだろう。(仮説②)

他者からのフィードバックの場面は、4人班で行った。自分が頑張ったことや高めた力を伝えてから、他者からフィードバックを受けることを全体で確認した。授業後に行った「自分のことをより理解できたか」の質問に、「できた」「どちらかといえばできた」と96.9%の生徒が肯定的な回答をした(図23)。ある生徒は、「自信をもって歌えた」という自己開示に対し、友達からのフィードバックを受ける場面では、「大きな声で歌ってくれて安心をもらえた」と伝えられ、自己開示

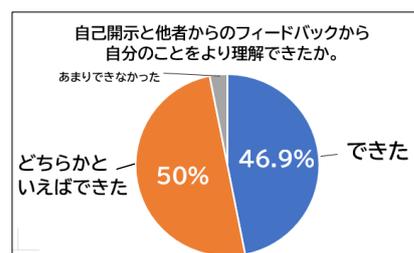


図 23 B中学校授業後のアンケート②の回答 (n=32)

した内容と他者からのフィードバックの内容が一致し、うれしそうしている姿が見られた。さらに、教師や保護者からも同様のフィードバックを受けたことで、振り返りの欄には「1・2年生の頃から課題だった自信をもって大きな声で歌うっていうのが、最後にできてよかった... (中略)、これからはすべてのことに全力で自信をもって物事に取り組んでいきたい」と記述した。このことから、生徒は自分が頑張って取り組んだことに対して他者から価値付けされたことで、自分に自信がもてるようになったと考えられる。

ウ 教師がこれからの生活に生かす視点を与えると、児童生徒は自分のよさや可能性をこれからの生活の場面とつなげることができるだろう。(仮説③)

教師が、今後の自分にどう生かせるかという振り返る視点を与えてから振り返りを行った。この視点により、生徒が自分のよさや可能性をこれからの生活につなげて考えられるようにした。図24は、昨年度と今年度の振り返りの中で、これからの生活につなげている記述<sup>38</sup>がある生徒の割合の比較である。これからの生活につなげている記述がある生徒が、0%から69.6%に増加した。2年時合唱コンクールの振り返りでは、「この合唱コンクールでは...」「来年の合唱コンクールは...」と全員が行事の感想のみであった。しかし、今回の振り返りでは、これからの生活に生かす視点を与えたことで、33名中23名にこれからの生活につなげようとする記述が見られた。その中でも、「この合唱コンクールで学んだことを生かして、学校生活を送つ

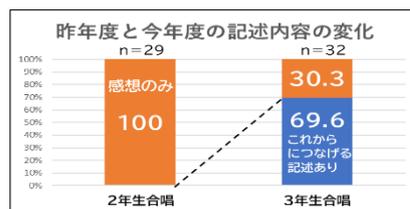


図 24 B中学校授業後のアンケート③の回答 (n=32)

表 10 B中学校の振り返りの記述内容

□具体的な記述なしの振り返り(全21人中2人抜粋)

- 生徒① これからは、この合唱コンで学んだことを生かして学校生活を送っていききたいです。
- 生徒② リーダーとして、もっとできることがあったと思うから、普段の生活にも生かしていききたい。

■具体的な記述ありの振り返り(全2人中2人抜粋)

- 生徒③ 日々の練習がいかに大事かがすぐ分かりました。サッカーでも普段の練習を大切にしていきたいです。
- 生徒④ 影で支えることの重要性を身をもって知ることができたため、高校でまた同じような仕事があったら、その時はまたその仕事をしていきたいと思った。

<sup>38</sup>これからの生活につなげている記述とは「これから他のところでもこの力を生かしていきたい」や「学んだことを、学校生活に生かしていきたい」などこれからの生活の場面につなげているもの、合唱のみの記述とは、「楽しかった」「賞がとれてよかった」「来年はこうしたい」など、合唱コンクールについてしか書かれていないものとした。

ていきたい (表 10 生徒①)」「普段の生活でも生かしていきたい (表 10 生徒②)」と抽象的な場面につなげている記述と、「日々の練習の大切さがすごく分かりました。サッカーでも普段の練習を大切にしていきたい (表 10 生徒③)」「影で支えることの重要性を… (中略)、その仕事をしていきたい (表 10 生徒④)」など、これからの生活の中の具体的な場面につなげている記述に分けられた。

### (3) 特別活動による実践 【C小学校 第6学年】

C小学校は、表 11 に示すような内容で、運動会前と後の2回に分けて検証授業を行った。

表 11 C小学校の授業内容

	行事前	行事後
課題	運動会のめあてや目標と活動計画を考えよう	運動会を通じて、高めた力や育まれた心を振り返ろう
ねらい	運動会を作り上げていくための見通しをもち、そのために必要なことについて話し合い、自分に合っためあてや目標を立てて実践できるようにする。	小学校最後の運動会を振り返り、自身の成長や頑張ったことから高めた汎用的な力を考え、これからの自分の生活に生かしていこうとする態度を養う。
授業の流れ	自分のこれまでの成長を「キャリア・パスポート」で振り返り、今年度の運動会で、どんな力を発揮できるのか、または成長させたいのかという課題意識をもたせ、めあてや目標を決めた。そのめあてや目標を達成するための具体的な取り組みを、班で考え、学級全体の場面で共有した。	「キャリア・パスポート」に記入しためあてや目標を確認し、自分の取組について振り返った。係別に分かれ、自分の頑張ったところを伝えると同時に他者からフィードバックをもらう場面を設定した。その後、自分の振り返りと他者からのフィードバックを踏まえて、もう一度自分の取組について振り返る時間を確保した。

#### ① 着目児童Cの授業の実際

運動会のめあてや目標決め場面では、昨年度の運動会の振り返りだけでなく、5月に行った全校遠足の振り返りに目を向け、「係の仕事をしっかりこなして、進行がスムーズになるようにする」と記入した (図 25)。授業後に行った「めあてや目標を決めるときに、参考にしたワークシートはなんですか」の発問に対して、着目児童Cは、運動会 (5年)、全校遠足 (6年)、前期の振り返り (6年)、週の頑張りシート<sup>39</sup>と答え、「キャリア

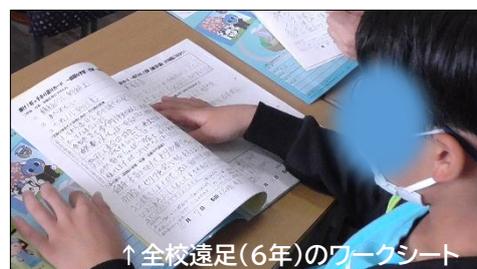


図 25 これまで蓄積したワークシートを振り返る着目児童Cの様子

ア・パスポート」に蓄積した様々なワークシートを振り返り、めあてや目標を記入したと答えた。このことから、着目児童Cは、これまで「キャリア・パスポート」に蓄積してきたワークシートから、今年度の目標を立てるのに必要なワークシートを自分で選択し、運動会の目標を決めたことが分かる。

運動会を振り返る場面では、教師の「運動会前にどんなめあてや目標を立てたのか」の発問に、「係の仕事をしっかりこなして、スムーズになるようにする」と自分のめあてや目標を確認した。その後、高めた力や育まれた心に「アドリブ力」、頑張って取り組んだことに「最後の発表の時、1点差だったからより盛り上がるように、得点をためて発表した」と記入し、自分が立てためあてや目標に対して、自分の取組を振り返ることができた。自己開示と他者からのフィードバックの場面では、自分が高めた力や育まれた心を伝えた後、「ハードル走を頑張っていた」「計算を頑張っていた」と友達からフィードバックを受け、ワークシートに書き加えた。後日、教師と保護者からのフィードバックを受けた後、もう一度振り返りを行う場面では、教師から「会場の雰囲気を感じたアドリブにより、一層会場が盛り上がった」、保護者からは「最後の得点発表がすごくよかった」と、自分が頑張ったと思っていたことを、さらに価値付けされた。着目児童Cの振り返りには、自分が頑張ったと思ったことをさらに他者からのフィードバックで価値付けされたことで、自分が身に付けた力を生かして、これからの生活をよりよいものにしていきたいと記述し、自分のよさをこれからの生活につなげる姿が見られた (図 26)。授業後に行った着目児童Cへのインタビューでは、「この授業を通して考えたことを教えてください」の質問に対して、「自分が思ったことだけで振り返りを書くのではなくて、友達、親、先生が思ったこととかを

<sup>39</sup> C小学校が行っている、毎週末に自分の今週頑張ってきたことを取りためている Google スプレッドシートのこと。

『キャリア・パスポート』で知ることができるので、よりよい振り返りが書けるかなと思った」と答え、他者からのフィードバックと「キャリア・パスポート」を振り返ることで、自分を客観的に振り返ったり、これからの見通しにつなげたりしていることが明らかになった。

検証授業前後に行った着目児童Cの自己理解・自己管理能力の比較では、質問4「自分の長所や短所を把握していますか」に対して、「2：どちらかといえばしていない」から「3：どちらかといえばしている」、質問5「自分の興味・関心について、進んで取り組んでいますか」に対して、「3：どちらかといえばしている」から「4：している」になり、肯定的な回答が見られた（図27）。

〇振り返り【自分の成長、これからの自分】  
 ぼくは、この運動会で高めた力を他のことにも生かしたいです。  
 例えば、協力を高めたので、委員会やクラブ活動で同じ学年  
 だけでなく、他の学年の人と協力してより楽しくいい活動にしたり、  
 アドリブ力で、思ったことを紙に描いたり多くのことに  
 生かしますこのよさを利用して残り半年の後の中学での生活を  
 よりよいものにしていきたいです。

図26 着目児童Cの振り返りの記述

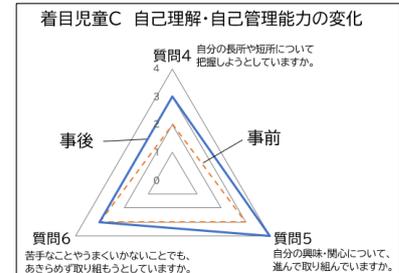


図27 着目児童Cの自己理解能力と自己管理能力の授業前後の変化

## ②学級全体の実際

ア これまでの「キャリア・パスポート」を活用することで、自分の取組を具体的に振り返ることができるだろう。（仮説①）

自分のめあてや目標はもちろん、なぜそのようなめあてや目標にしたのかを確認しながら、自分の取組を振り返らせた。図28は、授業後に行った「これまでの『キャリア・パスポート』を振り返ることで、めあてや目標が立てやすくなったか」のアンケート結果である。「なった」「どちらかといえばなった」と83.9%の児童に肯定的な回答が見られた。図29はある児童のワークシートの今年度のめあてや目標、工夫、頑張っているところ、よりよくできそうところ、高めた力や育まれた心の欄である。めあてや目標に「ソーラン節はすべての力を出して、『トリ』としてふさわしいものにしよう（図29①）」と定め、そのめあてや目標を達成するために、「指先まで動かす」「要所要所、動きを止めてキレを出す」「動作を大きく」など、具体的に記述した（図29②）。さらに、頑張っていることに「ポイントやキレを意識して練習を越える挑戦をした」（図29③）、よりよくできそうところでは、「キレをもっと強弱をつけることでより表せる」（図29④）と、細かいところまで自分の取組を振り返ることができた。その振り返りから、この児童は高めた力の欄に「挑戦する力」と記入した（図29⑤）。その他の多くの児童も、「キャリア・パスポート」で振り返り、今の自分に合わせためあてや目標を立てたことで、その目標に向かってすべき工夫を具体的に考えることができた。具体的に考えたことで、自分が頑張ったことやよりよくできそうなことについて、自分の細かな部分まで振り返ることができた。

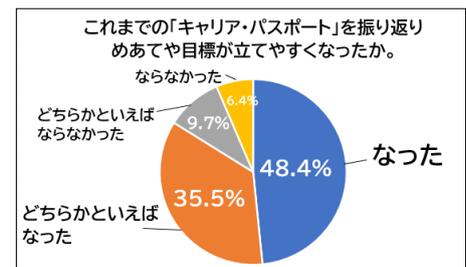


図28 C小学校授業後のアンケート① (n=32)

よりよくできそうところ、高めた力や育まれた心の欄である。めあてや目標に「ソーラン節はすべての力を出して、『トリ』としてふさわしいものにしよう（図29①）」と定め、そのめあてや目標を達成するために、「指先まで動かす」「要所要所、動きを止めてキレを出す」「動作を大きく」など、具体的に記述した（図29②）。

さらに、頑張っていることに「ポイントやキレを意識して練習を越える挑戦をした」（図29③）、よりよくできそうところでは、「キレをもっと強弱をつけることでより表せる」（図29④）と、細かいところまで自分の取組を振り返ることができた。その振り返りから、この児童は高めた力の欄に「挑戦する力」と記入した（図29⑤）。その他の多くの児童も、「キャリア・パスポート」で振り返り、今の自分に合わせためあてや目標を立てたことで、その目標に向かってすべき工夫を具体的に考えることができた。具体的に考えたことで、自分が頑張ったことやよりよくできそうなことについて、自分の細かな部分まで振り返ることができた。

今年度のめあてや目標  
 ① ソーラン節は全力を出してトリとしてふさわしいものにしよう  
 めあてや目標を達成するための工夫  
 ② ソーラン節  
 ・指先で動きを認識する 要所要所動きを止め  
 ・指先で追う キレを出す  
 ・フーフフ動作を大きくする  
 頑張っていること  
 ③ ソーラン節では完璧におどくためにポイントやキレを意識して練習をこらした挑戦をした  
 よりよくできそうところ  
 ④ ソーラン節  
 れでもしる強弱をつけてトリ表せる  
 高めた力・育まれたとその理由  
 ⑤ 挑戦する力 ちいごてにも使える 力・心

図29 めあてや目標から、高めた力と育んだ心までの記述

授業後に行った「参考にした『キャリア・パスポート』は何ですか」の質問では、運動会（5年）だけではなく、全校遠足（6年）や6年生になって（年度初めに書いたもの）、前期振り返り（6年）など、これまでの「キャリア・パスポート」に蓄積しているワークシートの中から自分で選択し、運動会のめあてや目標を記入したことが分かった（図30）。このことから、児童は自分で参考にする「キャリア・パスポート」を選択し、自分が取り組んできたことを振り返ることで、今年の運動会のめあてや目標を立てることにつながったことが明らかになった。

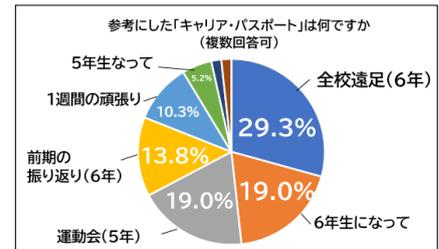


図30 C小学校授業後のアンケート② (n=32)

イ 自己開示と他者からのフィードバックを行うことで、自分が他者から価値付けられたり、自分が気付かなかった自分について新たに気付いたりすることができるだろう。（仮説②）

運動会の係別に、自己開示と他者からのフィードバックの場面を設定した。必ず自己開示のあとにフィードバックを行うことを確認してから始めた。保護者と教師からのフィードバックは、後日ワークシートにコメントを記入してもらおうとし、友達からのフィードバックは言葉で伝えることとした。その上で、新たに気付いた自分のよさを自分でワークシートに追記するように指導した。図31は、

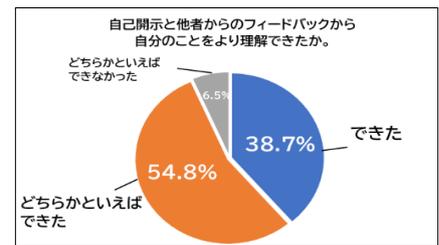


図31 C小学校授業後のアンケート③ (n=32)

「自己開示と他者からのフィードバックから自分のことをより理解できたか」の授業後のアンケートの回答である。「できた」「どちらかといえばできた」と93.5%の児童が肯定的な回答をした。ある児童は「仲間を信頼して、ソーラン節の声をしっかり出す。あとリレーのバトンパスとか合図とかをちゃんと聞いてできました」と自己開示したことに対し、友達から「児童代表の言葉をアドリブで話していたこと」を伝えられた。そして、少し得意げに、「そうそう全部アドリブ。台に上がる前に全部考え始めた」と言いながら、うれしそうに自分のワークシートに、「アドリブ力」と書き加えた。

授業後に行ったその児童へのインタビューでは、「児童代表の言葉を閉会式に行ってみて、ぼくは構成だけを紙に書いて、あとは思ったことをアドリブで言った。それをキャリアパスに書いてなかったが、友達から言われて、『あっ』と思って、自分の力は思ったよりあるなと思った」と答え、友達からのフィードバックによって、自分が気付かなかった自分に気付くことができた。このことから、他者からのフィードバックは、自分自身が気付いていない自分に気付かせてくれたり、自分のよさや可能性に気付く機会になったりすると研究会議では結論付けた。

ウ 教師がこれからの生活に生かす視点を与えると、児童生徒は自分のよさや可能性をこれからの生活の場面とつなげることができるだろう。（仮説③）

「自分が成長したことをこれからの生活にどのように生かせるのか」と発問してから振り返りを行った。最後に、クラス全体で高めた力や育まれた心とつながる場面を共有する時間を確保し（図32）、黒板にまとめた（図33）。全体で共有する場面を設定したことで、他者の発表をヒントにして、自分のよさや可能性をこれからの生活につなげる視点をもつことができると考えた。図34は、運動会（5年）、全校遠足（6年）、運動会（6年）の振り返りの中に、これからの生活につなげる記述がある児童と行事の感想のみの児童の人数の推移である。これからの生活につなげる記述を書いた児童は、運動会（5年）では0人だったが、5月に行われた全校遠足（6年）では8人、そして11月の運動会（6年）では20人になり、人数が段々と増加しているのが明らかである。図35はある児童の振り返り



図32 クラス全体で共有している場面

（6年）では20人になり、人数が段々と増加しているのが明らかである。図35はある児童の振り返り

の記述の変化である。運動会（5年）では感想のみで終わっていた振り返りの記述が、6年生の全校遠足では高めた力を他の場面とつなげ、運動会（6年）では、「自主的に取り組む力は、様々な場面で使えると思う。委員会やクラブなどで先生がいないときに自分から司会をしたりできるように、これからもこの力を高めていきたい」と記述し、これからの生活の具体的な場面と自分が高めた力をつなげており、記述の内容に変化が見られた。その他の児童の振り返りの中にも、委員会やクラブ活動、そして国語や算数などの教科などにつなげようとしている記述があった。さらに、小学校生活だけにとどまらず、中学校生活を見据えた記述も見られた（表12）。これからの生活につなげている記述を書いた生徒の中で、具体的な生活の場面につなげている児童と抽象的な場面のみの児童の人数を比較すると、これからの生活につなげた児童20人中、抽象的な記述のみの児童が8人に対して、具体的な場면을記述できた児童が12人おり、具体的な場面につなげている児童が多いことが分かった。

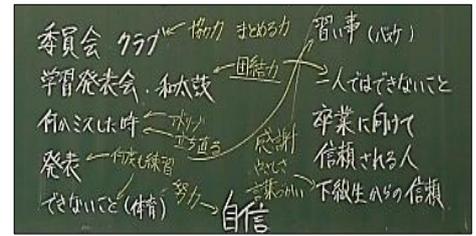


図33 黒板にまとめられた、高めた力や育まれた心とこれからの生活とつながる場面

表12 C小学校の振り返りの記述（抜粋）

- この運動会で高めた臨機応変に取り組む力を、委員会やクラブ、代表委員でも使いたいです。
- 児童①
- これらの力や心は国語や算数、体育で使っていきたいです。
- 児童②
- 引っ張る力は、委員会やクラブ活動、縦割り活動、習い事のダンスでも高めることができるので、これからもどんどん成長していきたいです。
- 児童③
- 協力する力を体育に使おうと思います。例えばマットで、技ができない人同士でやったりしたいです。
- 児童④
- 一生懸命に練習する力を、今後の学習発表会でも卒業式でも発揮できたいです。
- 児童⑤
- 次回はよいよ中学生なので、色々な人が来ると 생각합니다。色々な人が児童⑥ 来ても協力していきたいです。そのために、普段からコミュニケーションをしていきたいです。
- 児童⑥

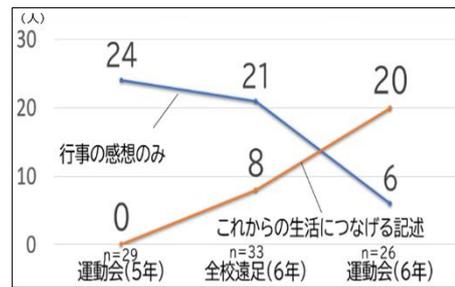


図34 C小学校の振り返りの記述にこれからの生活についての記述がある児童の人数の推移

5年生運動会	6年生全校遠足(5月)	6年生運動会(10月)
5年生になって運動会での役割があって、その役割を責任をもって取り組むことができたのが成長したところだと思います。	ぼくは全校遠足で高めた力はどこでも使えると思うけど、特に自分がリーダーの時に使っていきたいと思う。	自主的に取り組む力は様々な場面で使えると思う。その中でも委員会やクラブなど、先生がいないときに自分から司会などをできるようにこれからもこの力を高めていきたい。

図35 児童の記述の移り変わり

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 研究の成果

「キャリア・パスポート」で振り返ることから始まる一連の「キャリア・パスポート」の活用において、児童生徒が自己理解を深め、自分のよさや可能性を高めようとする姿を見ることができた。検証を実施し、明らかになった成果として次の5点を挙げる。

(1) 「キャリア・パスポート」で振り返ることで、自分の取組を具体的に振り返ることができた。(仮説①から)

「キャリア・パスポート」で振り返ることで、そのときに感じた気持ちや自分の取組を思い出すだけでなく、自分がこれまでに高めた力や反省など踏まえ、今年のみあてや目標を具体的に定められるきっかけとなった。具体的な目標になったことで、自分がどのように取り組めばよいのかを見通したり、その目標に向かってどのように取り組むことができたのかを振り返ったりすることができると思う。つまり、児童生徒が「キャリア・パスポート」で振り返り、めあてや目標を考える時間を設定することで、これまでの自分の取組を具体的に振り返り、「今」の自分に合わせためあてや目標を設定できることが明らかになった。

(2) 自己開示と他者からのフィードバックから、自分が他者から価値付けされたり、自分が知らなかった自分について新たに気付いたりすることができた。(仮説②から)

自己開示と他者からのフィードバックが自己理解を深めるとして、自己開示と他者からのフィードバックの場面を設定した。その結果、3校に共通して自己理解が「深まった」「少し深まった」とほとんど

の児童生徒が答えた。このことから、自己開示と他者からのフィードバックの場面を設定することで、他者から価値付けされたり、自分が知らなかった自分について新たに気付いたりすることができ、自己理解の深まりに有効であることが明らかになった。

では、自己開示と他者からのフィードバックの関係がどのような場合に自己理解は深まるのか。児童生徒のワークシートから自己開示の内容と他者からのフィードバックの内容が一致した数を分析<sup>40</sup>し、検証授業後に行った「自己理解が深まったか」のアンケートの回答を合わせて表にまとめた（表 13）。その結果、自己開示した内容と他者からのフィードバックの内容が一致した数が多かった児童生徒だけが自己理解が「深まった」「少し深まった」と答えたのではなく、一致した数が少なくても自己理解が「深まった」「少し深まった」と答えた児童生徒も多く見られた。このことから、自己開示した内容と他者からのフィードバックの内容が一致しているかいないかではなく、自分の取組に対して、他者からフィードバックをもらう機会を設定することが、児童生徒の自己理解に気付きを与えることが示唆された。

表 13 各校の自己開示の内容と他者からのフィードバックの内容が一致した数と自己理解の深まりの関係

	A小学校 自己開示の内容と他者からのフィードバックの内容が一致した数 (n=36)						B中学校 自己開示の内容と他者からのフィードバックの内容が一致した数 (n=32)						C小学校 自己開示の内容と他者からのフィードバックの内容が一致した数 (n=24)		
	4個	3個	2個	1個	0個		5個	4個	3個	2個	1個		0個	2個	1個
自己理解が深まったか	深まった	3	5	3	10	0	1	1	5	4	0	4	1	6	1
	少し深まった	2	2	5	5	0	0	1	3	5	3	4	5	6	3
	あまり深まらなかった	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	深まらなかった	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0

### (3) 教師がこれからの生活に生かす視点を与えると、児童生徒は自分のよさや可能性をこれからの生活の場面とつなげることができた。(仮説③から)

自己理解の段階を「Ⅰ：自分を知る」「Ⅱ：自分のよさや可能性を高めようとする」の2段階に分けたのは前述の通りである。

「Ⅱ：自分のよさや可能性を高めようとする」姿を見るために、自己開示と他者からのフィードバックのあとに、もう一度、自分自身を振り返る場面を設定した。その結果、自己理解が「深まった」「少し深まった」と答えた児童生徒の多くが、自分のよさや可能性を「高めたい」「少し高めたい」と答えた。このことから、自己理解が深まると、自分のよさや可能性を高めようと思うことが明らかになった（表 14）。さらに、教師がこれからの生活に生かす視点を与えると児童生徒は「これから高めた力や自分のよさを〇〇に生かしていきたい」など、高めた力や育まれた心をその授業や行事で終わりにせず、これからの生活とつなげていこうとすることが明らかになった。また、授業後に行った「なぜ自分のよさや可能性を高めたいと思ったのか」の自由記述の中に、「自分のためなところを直したいから」という回答が見られた。このことから、自分について肯定的なものだけでなく、自分に足りないところに気付いたことで、それを改善したいという意欲につながったと考えられる。

表 14 「自己理解の深まり」と「自分のよさや可能性を高めたいと思う」との関係（3校合計 n=95）

	自分のよさや可能性を高めたいと思う				
	高めたい	少し高めたい	あまり高めたくない	高めたくない	
自己理解が深まったか	深まった	35	10	1	0
	少し深まった	20	21	3	1
	あまり深まらなかった	3	0	0	0
	深まらなかった	0	1	0	0

### (4) 「キャリア・パスポート」は児童生徒の振り返りと見直しをつなげると同時に、様々な取り組みをつなげる。(「キャリア・パスポート」の効果)

「キャリア・パスポート」を振り返りと見直しをつなぐものにするために、自己理解に焦点を当て、「キャリア・パスポート」で振り返ることから始まる一連の活用を行った。その結果、授業後に行った『「キャリア・パスポート」がめあてや目標を立てるのに役立つもの』のアンケートでは「当てはまる」「やや当てはまる」の肯定的な数値が、A小学校では81%から91%、B中学校では55.1%から93.7%、C小学校では69%から83.9%に大きく増加したことが分かった（図 36）。つまり、「キャリア・パスポ

<sup>40</sup> 自己開示の内容と他者からのフィードバックの内容が一致した数とは、児童生徒が自己開示した内容と他者（各学校によって異なる）からのフィードバックの内容を比較し、同じ取組について書かれてある数とした。

ート」で振り返ることから始まる一連の活用を行うことで、児童生徒にとって「キャリア・パスポート」が、これまで（振り返り）とこれから（見通し）をつなぐものになったと考えられる。また、検証授業後に行った「行事と教科はつながりがあると思うか」「行事と将来はつながりがあると思うか」のアンケートでは、両方とも「思う」「少し思う」の肯定的な回答が増加していることが分かる（図 37、図 38）

このことから、自分のよさや可能性をこれからの生活につなげる視点がもてるようになれば、教科の学習や学校生活だけでなく、自分の将来など様々な取組のつながりを考えられる視点がもてるようになると示唆される。

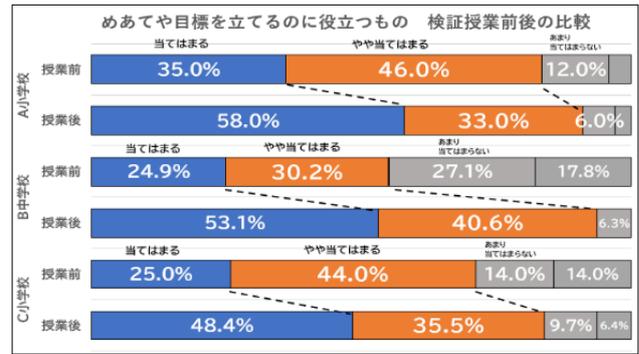


図 36 検証授業前後のめあてや目標が立てられるものの比較  
A小学校 (n=36)、B中学校 (n=32)、C小学校 (n=24)

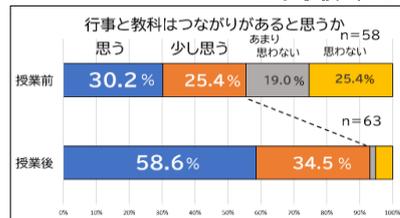


図 37 検証授業前後アンケート比較①  
(B中学校とC小学校)

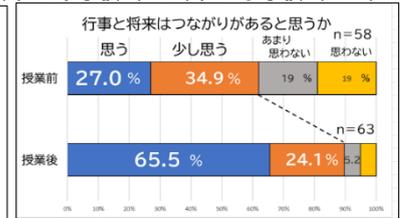


図 38 検証授業前後アンケート比較②  
(B中学校とC小学校)

### (5) 自分を前向きに捉えられるようになる。(児童生徒の変容)

各校の着目児童生徒は、基礎的・汎用的能力を構成する4つの能力の1つである自己理解・自己管理能力に関する質問に対して低い数値が見られ、自分に自信がもてない、または成長を前向きに捉えられていないと担任教師が感じていた児童生徒である。しかし、他者からのフィードバックにより、自分の頑張ってきたことが価値付けされたり、自分が気付いていない自分のよさを伝えられたりしたことで、改めて自分のよさに気づき、自分の取組に自信がもてるようになった。振り返りには「自分のよいところを続けていきたい」や「この経験を生かして様々なことに挑戦したい」と、自分のよさや可能性をこれからの生活につなげようとする記述も見られた。また、着目児童生徒の授業後の自己理解・自己管理能力に関するアンケートの質問④「自分の長所や短所について把握しようとしていますか」では、「4：している」「3：どちらかといえばしている」と答えた。また仮説②・③に関するアンケートでも、「4：できる」「3：どちらかといえばできた」や「4：高めたい」「3：少し高めたい」と肯定的な回答をした（表 15、表 16）。このことから、自分に自信がもてなかったり、自分の成長を前向きに捉えられなかったりする児童生徒でも、自己開示と他者からのフィードバックから自己理解を深めることで、自分に自信をもてたり、自分を前向きに捉えたりすることができたと考えられる。

## 2 より効果的な活用をするための課題と方法

「キャリア・パスポート」で振り返ることから始まる一連の活用において、児童生徒の自己理解を深め、自分のよさや可能性を高めようとする姿をめざして、検証を行い、III 1 で示した成果を上げることができた。しかし、児童生徒が「キャリア・パスポート」でより効果的に自己理解を深めていくために、仮説①～③についての課題と効果的な活用方法を述べる。

### (1) 「キャリア・パスポート」で振り返ること、自分の取組を具体的に振り返るためには（仮説①）

「キャリア・パスポート」で振り返り、自分のめあてや目標に役立てるならば、どのようなことを児童生徒に書かせ、何をワークシートに残していくのかを学年や学校で共通して決めておく必要がある。

表 15 着目児童生徒の検証前後のアンケート①の比較

質問	質問内容	着目児童A (検証授業前)	着目生徒B (検証授業前)	着目児童C (検証授業前)
質問④	自分の長所や短所について把握しようとしていますか。	4 (3)	4 (1)	3 (2)
質問⑤	自分の興味・関心について、進んで取り組んでいますか。	2 (3)	4 (3)	4 (3)
質問⑥	苦手なことやうまくいかないことでも、あきらめず取り組もうとしていますか。	3 (4)	1 (4)	3 (3)

表 16 着目児童生徒の検証前後のアンケート②の比較

仮説	質問内容	着目児童A	着目生徒B	着目児童C
②	自己開示と他者からのフィードバックにより、自分のことをより理解することができましたか。	4	4	3
③	自己理解を深めたことで、自分の長さや可能性をもっと高めたいと思いますか。	3	4	3

検証授業の中でも、昨年度のワークシートには自分の取組について具体的に記述されていなかったり、取組を通じて身に付いた力や成長したところが記入されていなかったりしており、ただの思い出だけが記述されている児童生徒が見られた。そのようなワークシートでは、児童生徒は何を振り返り、今の自分につなげていけばよいか分からない。「キャリア・パスポート」に蓄積するワークシートに記述する内容について、来年の取組に向けてなのか、取組を通して高めた力なのかなど学校全体で共通して決めておくことで、「キャリア・パスポート」で継続して振り返る視点を児童生徒が得られると考える。特に、高めた力や育まれた心を記述させることで、同じ授業や行事だけでなく、汎用的に使える力として自己のキャリア形成に役立つと示唆された。

## (2) 自己開示と他者からのフィードバックから、自分が他者から価値付けされたり、自分が知らなかった自分について新たに気付いたりするためには (仮説②)

自己開示と他者からのフィードバックを受ける機会が自己理解を深めることは研究の成果で述べた通りである。しかし、自己開示の場面で自分の取組をうまく伝えられなかったり、他者からのフィードバックの場面で、友達の取組について頑張っていたところやよいところを見つけられず、友達が自己開示をした内容をそのまま繰り返したりするだけの児童生徒が見られた。このことから、自分や友達の取組を振り返りの時間の中だけで振り返らせるのではなく、「めあてや目標を意識して取り組んでいるか」「友達の頑張っているところはどこか」など、教師が自分や友達の取組について、日々の生活の中で意識させる必要があると考える。日々の生活の中で自分や友達の取組について意識させることで、具体的な場面を踏まえて自己開示や他者へのフィードバックを行うことができ、自己開示と他者からのフィードバックの場面がより自己理解を深める場となると考える。

## (3) 教師がこれからの生活に生かす視点を与える場面で、児童生徒は自分のよさや可能性をこれからの生活だけでなく、より具体的な場面とつなげられるようにするためには (仮説③)

教師がこれからの生活に生かす視点を与えると、多くの児童生徒は自分のよさや可能性をこれからの生活につなげられることが明らかになった。しかし、視点を与えただけでは、これからの生活につなげられない児童生徒がいたのも事実である。このことから、教師がこれからの生活に生かす視点を全体に与えるだけでなく、個に応じた声掛けや日常的に教師がキャリア教育の視点を持ち、基礎的・汎用的能力を意識しながら児童生徒と関わっていく

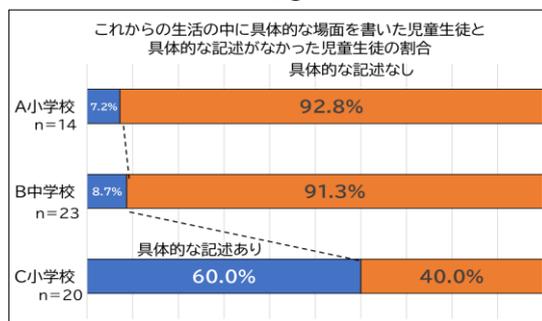


図 39 これからの生活の中に具体的な場面を書いた児童生徒と具体的な記述がなかった児童生徒の割合

ことが大切であると考えます。また、振り返りの記述の内容について、3つの学校を比べると具体的な記述を書いた児童生徒の割合に大きな差があることが分かった (図 39)。A小学校とB中学校は、「これからの生活につなげていきたい」といった抽象度の高い記述が多く見られたが、その後、検討を経て行ったC小学校では、「先生のいないときに自分から司会などをできるようにになりたい」など、具体的な場面とつなげる記述をした児童の姿が多く見られた。B中学校が中学3年生ということを考えると、学年が高くなれば記述できるものでもないということが分かる。C小学校は、2回の検証授業を踏まえ、教師がこれからの生活に生かす視点を全体に与えるだけでなく、記述できない児童と一緒にこれからの生活とつなげられる場面を考えたり、図 33 で示したように生活につなげられる場面を黒板にまとめながらクラス全体で共有したりする時間を十分に確保した。また、「キャリア・パスポート」で振り返ることを1回だけでなく、複数回行ったことも大きな要因だと挙げられる。このことから、教師がキャリア教育の基礎的・汎用的能力を意識すること、これからの生活につながる場面をクラス全体で共有すること、

「キャリア・パスポート」で振り返ることを繰り返すことで、児童生徒は自らのよさや可能性をこれからの具体的な生活の場面につなげられるようになると考えられる。

### 3 終わりに

本研究では、研究会議の中で、「キャリア・パスポート」をどのように活用すれば児童生徒の自己理解が深まるかについて、多くの時間を使い検討を重ねてきた。しかし、現場の先生方が「キャリア・パスポート」の活用について、多くの時間を使い検討を重ねることは難しい。そこで必要となってくるのが、学校の全体計画である。キャリア教育の年間計画の中に「キャリア・パスポート」を組み込んだ計画を作成し、年間5枚以内と定められている「キャリア・パスポート」に蓄積するワークシートや保護者や教師、友達からフィードバックをもらうタイミングをある程度決めておき、児童生徒がどんなキャリア形成を積み重ねていくのかを教師が意識していくことが必要だと考える。このような教師の意識が、児童生徒の資質・能力を育成するための手立てや仕掛け、関わりなどにつながっていくのではないだろうか。教師の細かな手立てや仕掛け、関わりなどについては、今後の研究に期待したい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、検証授業実践校の校長先生をはじめ学校教職員の皆様、アンケートにご協力くださった市内の先生方に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

#### 【参考文献】

- 津村俊充・山口真人『人間関係トレーニング 私を育てる教育への人間学的アプローチ』  
ナカニシヤ出版 2008年
- 長田徹『「キャリア・パスポート」が描く生徒の未来』キャリアガイダンス vol.423  
リクルート進学総研 2018年
- 藤田晃之『キャリア教育 フォービギナーズ』実業之日本社 2019年
- 文部科学省 国立政策研究所教育課程研究センター『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』文溪堂 2019年
- 児美川孝一郎『キャリア教育がわかる：実践をデザインするための〈基礎・基本〉』誠信書房 2023年
- 文部科学省『小学校キャリア教育の手引き』実業之日本社 2023年
- 長田徹・安井政樹「振り返りで学びをつなぐ」道徳科通信 No.4 光村図書 2023年

#### 【指導助言者】

- |                      |       |
|----------------------|-------|
| 日本体育大学児童スポーツ教育学部教授   | 橋谷 由紀 |
| 川崎市教育委員会事務局教育政策室担当課長 | 安斎 陽子 |
| 川崎市教育委員会事務局教育政策室指導主事 | 伊藤 悦子 |
| 川崎市教育委員会事務局教育政策室指導主事 | 佐藤 一輝 |
| 川崎市総合教育センター指導主事      | 望月 隆  |
| 川崎市総合教育センター指導主事      | 下村 智英 |

#### 【研究協力者】

- |             |         |
|-------------|---------|
| 川崎市立宮内中学校教諭 | 久保田 宗一郎 |
|-------------|---------|